

旧門司税関

国際貿易港としての門司の役割のため、1889年に長崎税関庁舎の支署が門司に設置された。それからすぐに門司は長崎よりも多くの船舶交通量となったため、1909年に支所は拡張され、正式な税関となった。現在あるレンガ造りの建物は最初のものに代わって1912年に建てられたもので、最初の税関はその2年前に全焼していた。

門司で最も古い歴史的建造物である旧税関は、戦火と閉鎖により荒廃してしまった。1945年の門司空襲では屋根が破壊され、長い間、板張りの空き家となっていた。1991年から元の姿に復元され、1995年に門司港レトロ歴史地区の一部として再オープンした。旧門司税関は現在、フルーツをテーマにしたカフェや日本の近代的な関税・消費税制度を紹介するコーナーを備えた休憩スペースとして機能している。シックな公共スペースであると同時に、過去の時代の不朽のシンボルでもある。

この建物の設計は、明治時代（1868-1912）の著名な建築家、妻木頼黄（1859-1916）が監修の下に行われた。ネオ・ルネッサンスの建築様式が、突き出たドーマー窓や屋根に沿った石彫りのコーニス、内部のシャンデリアなどに現れている。

内壁はかつて白い漆喰で覆われていたが、後に剥がされ、その下の100年以上前のオリジナルのレンガ造りが剥き出しになった。壁をよく見ると、レンガの間に一定の間隔で炭化した木製のブロックがはめ込まれているのがわかる。これらの木材にはドアや窓の材木や骨組みを固定するために釘を打つことができ、虫や腐敗を防ぐために意図的に炭化させられたと考えられている。

栄えた港の面影

建物の大きさや装飾は、かつての港の状況を反映したものだ。門司は漁師と塩づくり職人の小さな村から始まったが、1889年に石炭などの特別輸出港に指定されると急速に発展した。1896年には日本屈指の石炭輸出港となり、その年だけで約58万トンが門司から出荷された。門司は1899年に完全開港となり、1907年には日本への重要物資の輸入の20%以上を門司港で占めるまでになった。

今日(こんにち)の税関

建物の1階にある展示室は、あらゆる種類の密輸を阻止するための現代の税関での施策を説明している。当局が捜査対象の違法薬物や、密輸業者が行う違法薬物を隠すためのさまざまな試み（靴やシャンプーボトルや彫像の中など）や、没収された動物由来製品の例などが展示されている。

3 階の展望スペースは海に面した一角にあり、門司の現在の海岸沿いや門司港レトロ歴史地区の一部がよく見える。